

カンボジアのダークツーリズムに関する一考察
——観光資源として「虐殺」はどのように表象されているか——

Study on Dark Tourism as “Touristic Consumption”
in Contemporary Cambodia

羽谷 沙織*

要 旨

本稿の目的は、①カンボジアの歴史的な経緯をたどり、政治・社会・文化的背景がダークツーリズムとどのようにかかっているのかを検討する。②カンボジアが経験した虐殺と深くかかわる3つの施設、すなわちトウル・スラエン虐殺博物館 (Toul Sleng Genocide Museum)、ポル・ポトの墓 (Pol Pot's Tomb)、タ・モクの住宅跡 (Ta Mok's Residence) を訪問し、現地調査を通して収集したフィールド・ノーツを整理する。

Abstract

The Khmer Rouge regime in Cambodia took power in 1975 and established the state of Democratic Kampuchea (DK), but was overthrown in 1979. At least 1.7 million people died from starvation, torture, execution, and forced labor during this period. Since July 2006, the Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia (the Khmer Rouge Tribunal) has undertaken efforts to bring to trial senior leaders and those most responsible for crimes committed

* 立命館大学国際教育推進機構准教授

during the DK period. However, in the nearly four decades since the atrocity, the process of coming to terms with the genocide initiated by Pol Pot has taken new directions; one of these, namely, the touristic consumption and encounter with the tragedy, is often referred to as “dark tourism.”

This paper examines how a certain construction of modern Cambodian history contributes to dark tourism and how the government complements this process through its arrangement of genocide-related institutions, such as the Toul Sleng Genocide Museum, Ta Mok’s Residence, and Pol Pot’s Crematorium. To this end, this paper will introduce findings from fieldwork in Phnom Penh and in Oddar Meanchey province.

キーワード：ダークツーリズム、観光資源、カンボジア虐殺、トウル・スラエン虐殺博物館、タ・モク、ポル・ポト

Key words : dark tourism, touristic consumption of tragedy, Cambodian genocide, Toul Sleng Genocide Museum, Ta Mok, Pol Pot

はじめに

筆者は、立命館大学 2012 年度研究推進プログラム（基盤研究）「東・東南アジアにおけるダークツーリズムに関する地域間比較研究」（研究代表者：江口信清）の一環として、カンボジアで現地調査を行った。本稿は、その成果を報告するレポートである。この「東・東南アジアにおけるダークツーリズムに関する地域間比較研究」は、いわゆる死や災害現場、戦争跡地を訪れる観光（ダークツーリズム）が、どのような東・東南アジアの政治・社会・文化的背景と結びついているのか、これらの場所を訪れる観光客はどのような動機を持っているのか、当該地域におけるダークツーリズムがどのような意味と目的を内包するのかに焦点を当て、地域間比較を行う共同研究である。

本稿は、カンボジアを事例に取り上げる。カンボジアは、1975 年から 1979

年までポル・ポト率いる極端な共産主義を掲げるカンブチア共産党（Communist Party of Kampuchea、通称クメール・ルージュ）が大虐殺を行い、約170万人から200万人の人々が命を落とした¹⁾。本稿の目的は以下の2点である。①カンボジアの歴史的な経緯をたどり、政治・社会・文化的背景がダークツーリズムとどのようにかかっているのかを検討する。②カンボジアが経験した虐殺と深くかかわる3つの施設を訪問し、現地調査を通して収集したフィールド・ノーツを整理する。

1. フィールド・リサーチ

筆者は、「東・東南アジアにおけるダークツーリズムに関する地域間比較研究」の研究助成を受け、カンボジアにおいて現地調査を行った（プノンペン特別市、ウッドー・ミエン・チェイ州）。期間は、2013年2月22日-3月3日であった。参与観察、聞き取り調査、資料収集を行い、第1次データを入手した。調査地は、「観光地」として一般に公開されている①トウル・スラエン虐殺博物館（Toul Sleng Genocide Museum）、②ポル・ポトの墓（Pol Pot's Tomb）、③タ・モクの住宅跡（Ta Mok's Residence）である。フィールド・リサーチのなかで着目したのは以下の2点である。すなわち、本来、観光とは無縁の政治的な場であったトウル・スラエン虐殺博物館、タ・モクの住宅跡、ポル・ポトの墓が、どのように観光化しているのか。また、カンボジア政府は、虐殺を命じた首謀者とかかわりの深い場所をどのように制度化しているのかという点である。本稿では、カンボジアの歴史の暗部を伝えるこれらの観光スポットを訪問調査し、そこから得られた知見にもとづき、各施設が実際にどのように利用されているのか、その特徴などについて検討を加える。それとともに、「虐殺」をテーマとするカンボジアにおけるダークツーリズムのあり方について言及したい。

2. カンプチア共産党による大虐殺

外国人観光客がなぜカンボジアを訪れるのかという動機を考察するなかで、ポル・ポトによる大虐殺が彼らの動機付けに一定の影響を与えていることは無視できない。本節では、まず1970年代後半のカンボジアの歴史を振り返る。

ポル・ポト率いるカンプチア共産党は、政権の座についた1975年4月から1979年の1月までのおよそ4年間、当時約700万人の国民のうち、約170万人から200万人の人々を粛清した。1976年、民主カンプチア（Democratic Kampuchea）を樹立した。まず、前政権であるクメール共和国政権（1970-1975）に属していた関係者の探索に着手した。そして諜報機関員、秘密工作員、警察官、憲兵を処刑者の対象とし、カンプチア共産党に敵対する危険分子を排除した。そののち、粛清は、自らの党内において望ましくない階級の出身者や党に反発する思想を持つ者を見つけ出し、処刑するという方向にシフトした。ポル・ポトを含む党の最高幹部たちは、スパイを住民の間に潜入させ、労働農場や村落行政委員会活動を監督させた。組織的な粛清を展開するプロセスのなかで、党は全土に約200の治安機関として刑務所を設置し、危険分子を撲滅する統制施設として使用した。全国刑務所の拠点と位置付けたトゥル・スラエン刑務所（後述）は14,000人を収容し、その大多数は勾留、尋問、拷問、レイプ、処刑の犠牲となった（Dy 2007:48）²⁾。生還したのは画家、彫刻家、時計技師など特別な技術を持ったわずか12名であった（Dy 2007:48）。

1976年1月5日、民主カンプチア憲法を施行した。本憲法は、労働者、農業者、カンプチア革命軍戦闘員を含むすべての人々が農作業、工場労働、軍務に従事することを定めた。それはポル・ポトが理想と考えた、極限にまで単純化した集団主義的な社会の姿であった（四本 1999:20）。カンプチア共産党の革命思想は、極端な民族主義的かつ共産主義イデオロギーにもとづき、

西洋近代化した都市に住民が集中すること否定した。そのため病人、妊婦を含むすべての都市住民に強制退去を命じた。移住先の農村においては、従来の生活習慣、社会制度、貨幣制度、経済活動、家族生活を認めなかった。

学校教育も例外ではなかった。ポル・ポトは、フランス植民地時代に構築した学校教育制度が人々の間に格差をもたらしたと考えた。そのため知識人は社会の悪であるとし、多くの教師と学生を強制収容したのち虐殺した。学校教育を廃止し、教科書を焼き、教育施設やインフラを破壊しただけでなく、教育を維持する人的資源そのものを根絶した。小さな子どもを親と教育から切り離し、農業に従事させた。教育は勉学で得られるものではなく、党活動に参加して得られるものであり、真の大学は水田、労働の現場や工場にあると考えた（バーチェット 1992:108）。

このように、党の方針は、指揮命令系統をたどり農村部にまで広がった。党の最高指導機関である中央委員会を頂点とする治安システムは、その網を全土に張り巡らせた。1976年当時、全土を6つの管区に分割し、それぞれに党地方書記を置いた。管区の下には、地区、市という下部組織を設けた。たとえば、南西部管区党地方書記を担当したのは南部タカエウ州の出身のタ・モク（Ta Mok）であった（ヘダー & ティットモア 2005:150）。タ・モクが生前に最後の政治活動の拠点としたウッドー・ミエン・チェイ州にある住宅跡は、現在、観光地として一般に公開されている（後述）。彼は南西部管区内において虐殺、粛清を直接指示した件、部下の残虐行為を防止しなかった件について重要な責任を問われた。しかし、2006年（当時80歳）に亡くなり、くしくも同年に開始したカンボジア特別法廷(Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia、別名クメール・ルージュ法廷)は、彼の法的責任を明らかにすることができなかった³⁾。

3. 観光資源としての虐殺の歴史

本節は、筆者が訪問した3つの施設に関するフィールド・ノーツを記載する。訪問先は、①トウル・スラエン虐殺博物館(Toul Sleng Genocide Museum)、②ポル・ポトの墓(Pol Pot's Tomb)、③タ・モクの住宅跡(Ta Mok's Residence)であった。

3-1. トウル・スラエン虐殺博物館(プノンペン特別市)

[施設の背景]

1975年から1979年の間にカンプチア共産党は、全土に約200の治安事務所と呼ぶ政治犯収容所を設置した。なかでも、首都プノンペンのほぼ中心にある高等学校を政治犯収容所の全国の拠点と位置づけた。これをトウル・スラエン処刑場(暗号名S21)と呼んだ。暗号名のSは治安、公安を意味するクメール語のsovatapheapの頭文字を取った。党はS21を反革命分子を尋問する場所として用いた。1962年に設立された3階建ての公立高等学校(Chao Ponhea Yat High School)を収容所として再利用したことは、党の方針と無関係ではない(Dy 2007:48)。先述したように、カンプチア共産党は西洋式の近代学校教育制度を否定した。学校教育制度を破壊し、学生、生徒、児童から教育を受ける機会を奪い、教員を虐殺の対象とした。子どもが学ぶための学校は、殺されるための収容所と化したのである。1979年1月、ヘン・サムリンは人民革命評議会議長に就任し、カンプチア人民共和国を樹立した。ポル・ポトは政権の座を失った。1979年8月、トウル・スラエン処刑場はトウル・スラエン虐殺「博物館」として再出発した⁴⁾。

[開館の目的]

国立トウル・スラエン虐殺博物館は、文化芸術省文化遺産局博物館部の管轄下であり、カンボジアの人々および外国人観光客を対象に開館している



写真1 トウル・スラエン虐殺博物館の門構え（クメール語と英語の2言語表記）（2013年2月筆者撮影）

（写真1）。施設内に掲示されている説明文書によると、1980年に開館した1年の間に、およそ30万人のカンボジアの人々、11,000人の外国人がこの場所を訪れた。2010年の来訪者数は6万人、2011年は12万人であった⁵⁾。現在は、1日あたり250人の訪問客がある（写真2）。外国人観光客だけにとどまらず、カンボジアの人々も亡くなった両親、兄弟、親族の行方に関する情報を収集するために訪問するという。

トウル・スラエン虐殺博物館は、虐殺の歴史を風化させないための教育的施設という目的を持っている。トウル・スラエン虐殺博物館が観光客に配布するクメール語・英語版のパンフレットは以下のように自らの使命を説明する。

「ポル・ポト政権下における非人道的な犯罪を公共の場に掲示することは、アンコールの土地、そして地球上のどの場所においても、新たなポル・ポトを認めないという意味において、極めて重要な意味を持っている」（Ministry of Culture and Fine Arts n.d.:1-2）。

他方、残酷な処刑を繰り返したポル・ポトをはじめとする党の最高幹部た



写真2 トオル・スラエン虐殺博物館を訪問するアジア系観光客 (2013年2月筆者撮影)

ちに法的な責任を負わせるための証拠を保存する目的もある。それゆえ、当時の状況をできるだけ再現することを企図した館内構成となっている。同時に平和博物館としての機能も備えるよう徐々に変化をしている。たとえば、展示物は多くがクメール語の説明文書を添えている。くわえてフランス語、英語（ときおり日本語）といった多言語表記を目にすることができる（写真3、写真4）。さらに、ベルギー政府、スウェーデン政府、アメリカ政府の協力のもと、カンボジアおよび外国人講師による無料の講義や（月曜日午後2時-3時、水曜日朝9時-10時、金曜日午後2-3時）、ワークショップも開催している。このようにして、トウル・スラエン虐殺博物館は、虐殺に関する有形の証拠だけでなく、講義やディスカッションという平和啓発とつながる無形のサービスも提供している（写真5）。つまり、平和博物館として新しい意味づけを行っていると言えよう。



写真3 トオル・スラエン虐殺博物館に掲示される尋問規則（クメール語、フランス語、英語の3言語表記）（2013年2月筆者撮影）



写真4 母親から乳幼児を取り上げるクメール・ルージュ（クメール語、英語、日本語の3言語表記）（2013年2月筆者撮影）

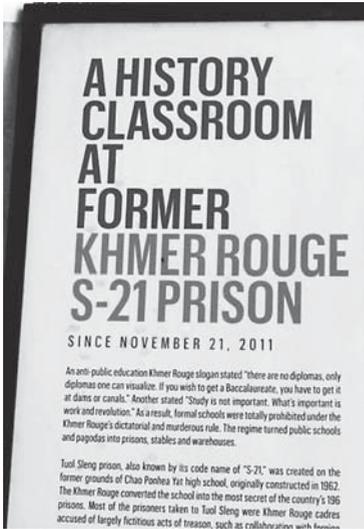


写真5 トオル・スラエン虐殺博物館で実施するワークショップの案内(英語表記)
(2013年2月筆者撮影)

[フィールド・ノート]

トウル・スラエン虐殺博物館は、外国人を対象に実質的料金制度(2ドル)を導入しているが、社会教育施設という性格から、カンボジアの人々の観覧料を免除している。敷地は600メートル×400メートルの広さである。敷地内には3階建ての校舎が4棟あり、A棟からD棟までである。A棟は、ポル・ポトに反逆したとされる人々の尋問・監禁棟であった。A棟の1階にある部屋に入ると、吹きさらしの床に、錆びた鉄パイプのベッドを目にする(写真6)。壁には拷問を受け、そのベッドに横たわりながら亡くなっ



写真6 トオル・スラエン虐殺博物館のA棟(尋問・監禁棟)の一室を撮影する観光客(2013年2月筆者撮影)

た男性の写真が展示してある。B棟からD棟の1階は独房、2、3階は大勢の囚人を勾留する場所であった⁶⁾。現在は、B棟の1階部分は、尋問中に撮影した、おびたしい数の白黒写真で埋め尽くされている。拷問の末に亡くなった人の写真もある(写真7)。C棟にある独房には自由に出入りすることができる。D棟は現在、展示室として公開されている。処刑場から生還した画家が当時の拷問の様子を描いた絵画が展示してある(写真8)。拷問で使われた器具も置かれている。この場所で亡くなった人々の骨や骸骨も陳列しており、それらの人骨の前には、鎮魂のための線香が供えてある。

外国人の団体客は観光バスで乗り付ける。入口の門の前にはペットボトルの水、ジュース、菓子を売る売店がある。外国人を目当てに、地雷によって片足を失った障がい者が外国語で書かれた本を売ったりする。筆者はこの場所を訪問した日、アジア系、ヨーロッパ系の外国人観光客を敷地内で見えた。外国語で説明をすることができる現地ガイドとともに訪問している。外国人観光客の年齢はおよそ20代から70代であった。幼い子どもや10代の若者の姿はなかった。カンボジアの人々の姿はまばらであり、当日、カンボジアの20代の男子大学生(文系)と出会った。彼は、1人で訪問していた。彼は、高校生の頃に1度、トゥル・スラエン虐殺博物館を学校の社会見学の一環で訪問した経験がある。大学生になり、カンボジアの大虐殺の歴史を考えたいと思い、再訪したと言う。彼によると、カンボジアの多くの人々にとってトゥル・スラエン虐殺博物館は、観光地ではなく、肉親や過去について思いをはせる場所であると語った。

3-2. タ・モクの住宅跡(ウッドー・ミエン・チェイ州)

[施設の背景]

タ・モクは、1950年に出身地のタカエウ州においてインドシナ共産党に入党した。1950年代末には、郡党責任者となり、1963年にカンブチア共産党の中央委員に選出された。1968年には、党中央員会常務委員と軍事委員を兼



写真7 トオル・スラエン虐殺博物館が展示する拷問の末に
 亡くなった男性（クメール語、英語の2言語表記）
 (2013年2月筆者撮影)



写真8 虐殺を描いた絵（説明書きなし）(2013年2月筆者撮影)

務しながら、南西部管区党地方書記を務めた（ヘダー&ティットモア 2005:150）。彼は、地方書記という権限を行使して、自ら指揮して党幹部を逮捕した。多くの人々を処刑し、死に追いやった責任を問われた。

民主カンプチアが政権の座から退いた後、タ・モクはカンボジア北部のウッドー・ミエン・チェイ州のアンロン・ヴェーンに拠点を置き、活動を継続した。その拠点をタ・モクの住宅跡と呼ぶ（写真9）。土埃のなかをアンロン・ヴェーンの町から北に進むと、ぽつりとタ・モクの住宅跡がある。彼が作らせた人工のアンロン・ヴェーン湖の畔に位置する。観光地という言葉から想起されるイメージとは異なり、入口を示す小さな看板があるのみである。

[フィールド・ノート]

ウッドー・ミエン・チェイ州はタイとの国境を接する地方都市である。カ



写真9 タ・モクの住居跡（2013年2月筆者撮影）

ンボジアの観光地であるシナム・リアプ州から車で3時間を要する。外国人観光客が頻繁に訪れる場所とは言い難く、タ・モクの住宅跡はカンボジアの人々の姿ばかりである。敷地は広く、マンゴーの木が生い茂っている。その木陰で、カンボジアの伝統医療と現地の人が呼ぶ薬草を販売している女性がいた(写真10)。薬草は、体のほてりを取り、滋養強壮に効くと言う。1パック200グラムの薬草は2.5ドルであった。筆者が訪問した日には、10名ほどのカンボジアの高校生がいた。彼らの観覧料は免除である。外国人観光客の観覧料は2ドルである。観光省の管轄である。

地上2階建地下1階の屋敷は雨風にさらされた吹きさらしの家である。屋敷内には、観覧に関するインストラクションや観覧順路はない。施設を説明するような掲示物もほとんど見当たらない。ただし、1階の居間の窓ガラスのない窓の枠に、一枚の青い掲示板がぶら下がっている。「ここはタ・モクが会議を行った部屋です」というクメール語の説明文である(写真11)。英



写真10 タ・モク住居跡で薬草を販売する女性(左)と筆者の調査協力者(右)(2013年2月筆者撮影)

語、フランス語の翻訳はない。その会議室のなかで、もっとも目を引くのは壁に描かれた3枚の額に入っていない剥き出しの絵である。どの絵にも説明文はない。ただし、訪問者がそれらに触れることがないように、床にパターションがおいてある。

3枚の絵は色彩豊かである。左に描かれているのは、涼しげな川で水浴びをする3頭の象の姿である。晴天のなかで、象とともに自然と戯れるのは、猿、鹿。牧歌的なイメージを感じさせる図案である。中央の絵は、カンボジアの巨大地図である（写真12）。それぞれの州を色とりどりに塗り、州内の地区名をクメール語で細かに記してある。道路網も正確に描いている。タ・モクが生前にこの地図の前で戦略会議を行った様子が想像できる。そのとなりに、アンコール・ワットを正面から堂々と描いた壁画がある（写真13）。石畳の参道の奥にアンコール・ワットが鎮座している。見る者はまるでそこを訪れたかのような錯覚に陥る迫力である。



写真11 タ・モクの会議室の窓際にぶら下がる説明書
「この部屋はタ・モクの会議室です」（2013年2月筆者撮影）



写真 12 タ・モクの会議室に描かれたカンボジア全土の地図 (2013年2月筆者撮影)



写真 13 タ・モクの会議室に書かれたアンコール・ワット (2013年2月筆者撮影)

10名ほどの高校生は、制服を身に着け、友達同士で気楽に遊びに来たような雰囲気を持っていた。彼らは、まず、屋敷内に入る際に靴やサンダルを脱ぎ、土足ではなく裸足で家の中に入った。そのうちの数名は、拝み棚の前で線香に火をつけ、両ひざを床について熱心に祈った(写真14)。棚の前には、寄付金箱やライターや水が置いてある。筆者が話しかけたのは、高校3年生の男子生徒であった。彼に何を祈ったのかと聞くと、その週に予定している試験で満足のいく結果が得られるよう祈ったと言った。他の数人の高校生も同様の意見を述べた。タ・モクの政治的活動についてはあまり知らず、試験の前になると時々、友達とタ・モクを訪れるのだと言う。



写真14 タ・モクに試験で満足のいく結果が得られるよう祈る男子高校生 (2013年2月筆者撮影)

3-3. ポル・ポトの墓 (ウッドー・ミエン・チェイ州)

[施設の背景]

1979年1月、ヘン・サムリンは国家評議会議長に就任し、カンプチア人民共和国(1979-1989年)を樹立した。このカンプチア人民共和国(通称ヘン・サムリン政権)は、ベトナム軍の支援を受けながら社会主義国家の建設を目指した(羽谷2011:137)。ポル・ポトは政権の座を失うと、カンボジア北部のウッドー・ミエン・チェイ州のアンロン・ヴェーンに拠点を移し、ヘン・サムリン政権への武装闘争を続けた。1997年6月、ポル・ポトは政府と和解交渉を試みた長年の盟友ソン・セン(Son Sen)を殺害しようとした。しか

し、タ・モクはボル・ポトを裏切り者として逮捕し、自宅監禁した。1998年4月、ボル・ポトは心臓発作のため亡くなった。ただし暗殺説もあり、彼の死亡については謎もある。彼は法的に裁かれることなく、この世を去った。ボル・ポトを火葬した場所は、アンロン・ヴェーンから13キロ離れた、タイ国境まで徒歩5分の場所である。1998年以来、観光省が管理する施設として、一般に公開されている。

[フィールド・ノート]

ボル・ポトの墓は、アンロン・ヴェーンの町の北側にある。町から舗装された道路を山に向かって走っていく。すれ違う車やバイクはまばらである。山に向かって坂道をあがりきると、カンボジアとタイの間の国境検問所にたどり着く。国境検問所の手前に、フルーツジュースや土産物売る店、マニキュアを塗る店、食堂が軒を連ねる。この通りは舗装されている。うら寂しい印象を与える場所であるが、特筆すべきは、巨大な観光ホテルの存在であ



写真 15 ボル・ポト墓にほど近い国境検問所の周辺、巨大ホテルが建設中 (2013年2月筆者撮影)

る。およそ20階建ての白亜のホテルが建設されようとしている。タイ人観光客を呼び込もうとカジノを併設したホテルである（写真15）。

ポル・ポトの墓は、この検問所の少し手前の右側にある。青いカンバスに白い文字で「ポル・ポトはここで火葬されました」書かれた看板がある（クメール語と英語の2言語表記、写真16）。これがなければ、見落とすほどに簡素な門構えである。墓は、観光省が管轄する施設である。観覧料はカンボジアの人々は免除される。外国人は2ドルである。

墓は、低賃金労働者が暮らす小さな集落の一角にある。舗装されておらず、砂ほこりが舞う集落にひっそりと佇んでいる。民家から離れたところに、ぼつりとある。縦1メートル×横1.5メートルほどの敷地面積である。「ポル・ポトはここで火葬されました。歴史的な場所を保存するために協力しましょう。観光省」という立て看板がある（クメール語と英語の2言語表記、写真17）。墓といっても、墓石はない。祠（小堂）のように小規模な作りであり、敷地内には草が伸びている。ゴミは落ちていない。20代の男性1名が行政管理者として観覧料を徴収したり、看板を立てるなど施設の整備にあたりしている（写真18）。「大切にしましょう」という小さなクメール語の説明書きが祠に貼ってある（写真19）。これは、青いカンバスに白い文字という先に見た2つの看板と同じデザインであることから、観光省のメッセージと理解することができる。祠の前には、小さな棚が置かれている。棚の上には、線香、枯れた花、ビール缶、皿、茶碗、コップ、ライター、さい銭箱がある。



写真16 ポル・ポトの墓を示す立て看板
（クメール語、英語の2言語
表記）（2013年2月筆者撮影）



写真 17 ポル・ポトの墓を示す観光省の看板（クメール語、英語の2言語表記）（2013年2月筆者撮影）



写真 18 ポル・ポトの墓を管理する行政管理者（左）と筆者の調査協力者（右）（2013年2月筆者撮影）



写真 19 ポル・ポトの墓に掲示された看板「大切にしましょう」(クメール語表記)

(2013年2月筆者撮影)

さい銭箱は、地面に打った杭と太い鎖で繋がっている。行政管理者によると、カンボジアの人々や外国人観光客が時折訪れ、寄付をしたり、お供えをしたりすると言う。近所に住むカンボジアの人々や遠方から来たカンボジアの旅行者は、賭け事やカジノで勝てるようにとポル・ポトに祈願すると言う。その際、人々はビールを供え、さい銭を置いていく。他方、カジノ目当てに訪れた外国人観光客は、観光スポットの一つとして、この場所に立ち寄り、行政管理者からポル・ポトに関する話を聞いたりする。

4. 考察—訪問者の動機、言語から見る対象者、施設の役割—

以上、前節は3つの施設における観察記録を記した。これらの施設に関して得た知見は、以下の3点である。

4-1. 訪問者の動機

訪問者はどのような動機にもとづいて、これらの場所を訪れるのだろうか。現地調査から、トウル・スラエン虐殺博物館を訪れるカンボジアの人々は、この場所で虐殺された両親、兄弟、親族の行方に関する情報を収集することを目的としていることが分かった。トウル・スラエン虐殺博物館のB棟は尋問中にクメール・ルージュが撮影した無数の写真を展示している。これらの写真の中から肉親を捜すカンボジアの人々は少なくない。他方、筆者がフィールドワーク中に出会った20代のカンボジア男子学生は、大虐殺の歴史について考えることを目的にこの場所を訪れた。カンボジア現代史を学ぶ目的からトウル・スラエン虐殺博物館に赴くのは、カンボジアの若者に限られたことではない。外国人観光客もまた史実を学びたいという動機から、本施設の訪問を旅程の一部に組み込んでいる。トウル・スラエン虐殺博物館が虐殺の歴史を風化させないような取組みを行っている制度的意図と訪問者の動機はおおよそ一致する。

しかしながら、タ・モク住宅跡とボル・ポトの墓を訪れる動機は、それらが内包する政治的、歴史的な意味とはかけ離れたものであった。カンボジアの人々は、タ・モクやボル・ポトの政治的イデオロギーを批判するために、これらの場所を訪れるのではない。フィールドワークから明らかになったことは、カンボジアの人々がこれらの施設を訪問するのは、学校の試験でよい結果を得ることができように祈願するという動機やギャンブルで儲けが出るように祈るという動機にもとづくということであった。ボル・ポトの墓は、カンボジア・タイ国境検問所の近くに位置し、カジノホテルの目と鼻の先に

ある。このような立地条件は、周辺のツーリズムに少なくない影響を与えている。虐殺によって肉親を失った人々が、タ・モクやポル・ポトをまるで敬うかのように、願い事をするのはなぜだろうか。カンボジアの人々がタ・モクやポル・ポトをどのように捉えているのかという点は、今後の検討を要する。

4-2. 言語から見る対象者

次に検討するのは、これらの施設が誰を対象としているのかという問題である。展示品をどの言語で表記するかという観点から考えると以下のことが指摘できる。トウル・スラエン虐殺博物館は、展示品を多言語（クメール語、フランス語、英語、ときおり日本語）を用いて表記している。トウル・スラエン虐殺博物館では、施設の歴史的背景をクメール語と英語によって記したリーフレットが無料で配布されている。虐殺の歴史に関する無料の講義、ワークショップ、ディスカッションは英語で実施した。しかしながら、タ・モク住宅跡は、パンフレットを配布していない。屋敷のなかにある看板はすべてクメール語の表記であった。ポル・ポトの墓でもパンフレットを配布していない。観光施設であることを示す2つの立て看板は、クメール語と英語の2言語表記であった。祠に貼ってある小さな看板はクメール語で書かれた。

以上のことから、トウル・スラエン虐殺博物館は、カンボジアの人々のみならず、外国人観光客も対象としていることが分かった。クメール語、フランス語、英語、日本語という多言語表記は対象者を限定せず、この場所を「開かれた」施設として開放していることを明示する。2言語表記という点から考えると、ポル・ポトの墓もまた外国人観光客を取り込みたい意図が垣間見られた。ところが、タ・モク住宅跡にある掲示板はクメール語のみの表記であり、この点において、タ・モク住宅跡はカンボジアの人々を主な対象者とした「閉じられた」施設であると推測できる。ただし、タ・モク住宅跡とポル・ポトの墓が誰を対象とした施設なのか、それゆえどのような言語で表

記するのかを検討するにあたっては、本フィールド・リサーチが提示する限定的なデータのみでは不十分である。そもそも国家がタ・モクやポル・ポトと彼らが指示・実行した虐殺をどのように自国史のなかに位置づけるのかという国民的な歴史の編さんをめぐる議論を検討する必要がある。これらを国立の施設として運営していくべきか否か、国民を対象とするのか、外国人を対象とする施設へと変えていくのかという論争は、虐殺と暴力を経験したカンボジアの国家再建プロセスの第一歩に他ならないであろう。施設の制度化は、賠償や真相解明といった社会的責任と深くかかわる。

4-3. 施設の役割

以下では、3つの施設の役割の特徴を整理する。トウル・スラエン虐殺博物館は、A棟からD棟へ観覧するという順序があり、それに沿ってどのように展示品を陳列するという構成が明確であった。展示品についての解説もあり、全体として整備された平和博物館を目指すという設立目的が見て取れた。実のところ、トウル・スラエン虐殺博物館は外国政府からの援助を受けており、たとえば日本のJICA（独立行政法人国際協力機構）は2009年5月から2012年3月まで「沖縄・カンボジア『平和博物館』協力」を実施した。トウル・スラエン虐殺博物館を管轄する文化芸術省は、日本に文化芸術省文化遺産局博物館副部長らを派遣した。プロジェクトの目的は、①沖縄県平和祈念資料館の経験にもとづき、カンボジアの虐殺の資料収集・保存・展示をするアーカイブを整備すること。②そのアーカイブを通して、平和構築につながる教育活動、広報活動、資料展示のありかたを検討することであった。トウル・スラエン虐殺博物館は、このような外国からの支援をもとに、カンボジアの人々にとっての記憶の場を構築している。虐殺の歴史に関する無料の講義、ワークショップ、ディスカッションも開催し、平和啓発へとつながる活動を展開している。

他方、タ・モク住宅跡とポル・ポトの墓は、観覧順序、陳列構成、解説の

点において、未整備であった。観光省は、ポル・ポトの墓を「歴史的な場所」と位置づけ、「保存するために協力」する必要があるとした。ポル・ポトの墓を保存する価値がある歴史・観光施設と捉えていることが分かる。しかしながら、タ・モク住宅跡もポル・ポトの墓も施設の歴史的背景や設立目的を記した説明文書は見当たらず、施設の保存に関しても十分な予算を充てているとは言い難かった。政府は、これらの施設に対する積極的な意味付けを回避しているのだろうか。先に述べた通り、タ・モクとポル・ポトと縁のある施設を国立施設としてどのように制度化するのかという点については、憎悪と赦しの感情が入り乱れる国民的議論を待たねばならない。これは、単なるインフラ整備という問題ではない。国民和解、平和構築のコンテクストのなかで議論されるべき極めて重要な論点であろう。

補論—カンボジアを見つめるまなざし—

補論では、日本の一般的な大学生が、どのようにカンボジアを見つめているのか、そのまなざしを検討する。検討にあたり、2011年に公開された日本映画「僕たちは世界を変えることができない—But we wanna build a school in Cambodia」を取り上げる。

カンボジアにおける観光スポットとして注目されているのは、シラム・リアプ州にある世界遺産アンコール遺跡群であろう。密林のなかにたたずむ幻想的な石造りの寺院は、異国情緒を感じさせる観光スポットとして魅力的である。他方、それと並んで多くの観光客が訪れるのは、アキ・ラ地雷博物館（シラム・リアプ州）、トゥル・スラエン虐殺博物館（プノンペン特別市）、キング・フィールド（プノンペン特別市）である。

1. 映画「僕たちは世界を変えることができない」

日本の現代的な若者がカンボジアをどのように見つめているのかを考察

する手掛かりとして、2011年に公開された映画「僕たちは世界を変えることができない—But we wanna build a school in Cambodia」を挙げることができる。この映画は、毎日を漠然と生きている日本の大学生が、カンボジアに小学校を建設することで、カンボジアの子どもたちに笑顔を与え⁷⁾、ひいては自分の人生に意義、やりがい、可能性を見出すという物語である。主人公たちは、アルバイト、コンパ、サークル活動を繰り返しながら、なんとなく大学生活を送り卒業していくことを平凡で虚しいと感じている。ありきたりの毎日を変える何かがある。彼らは、募金活動、企業からの資金調達を通して150万円を手に入れ、カンボジアに学校を建てるという経験を求める。

映画のなかで、初めてカンボジアを旅する4人の男子大学生が選んだ訪問先は、シナム・リアプ州立病院エイズ病棟、トウル・スラエン虐殺博物館、キリング・フィールドであった。シナム・リアプ州立病院エイズ病棟を訪問すると、若く美しいカンボジア女性ソベアを紹介される。実は、彼女は夫を介してエイズに感染した（映画の後半部分において、彼らは彼女の死亡を知らされ、茫然とする）。4名の大学生はその事実に衝撃を受け、カンボジアが抱える現代的な問題に直面する。つづいて、トウル・スラエン虐殺博物館、キリング・フィールドを訪問し、同行したカンボジア語—日本語ツアー・ガイドのプティーから虐殺の歴史について説明を受ける。彼らは、トウル・スラエン虐殺博物館が展示する虐殺の様子を示した絵を見ながら、肩を落とし、残酷な歴史に打ちひしがれる。スクリーンのなかで、彼らがカンボジアの歴史や社会について下調べをした様子は描かれなかった。したがって、トウル・スラエン虐殺博物館とキリング・フィールドの訪問は、彼らが初めてカンボジアの歴史と出会う場所としての役割を担った。

ところで、大手旅行代理店H.I.Sは映画「僕たちは世界を変えることができない」と連携し、映画のシーンをめぐる公式ツアーを企画した。以下に、H.I.Sのウェブサイトに掲載された情報を整理した⁸⁾。「映画のシーンをめぐるカンボジア8日間」は2012年2月9日と2月23日に実施された。本企画

表1 H.I.S「映画のシーンをめぐるカンボジア8日間」の旅程表(2012年2月)

*表中の表現はウェブサイトのオリジナル

1日目	東京・成田(09:30)発→(乗継ぎ)空路、プノンペンへ プノンペン(16:30)着、アイスブレイクレクリエーション 【プノンペン泊】
2日目	キリング・フィールド、トゥール・スレン見学 カンボジアの負の歴史を目の当たりにします。 プノンペン大学訪問 日本語学部の学生たちと交流します。 自由行動 メコン川クルージング サンセットクルーズ後、夕食 【プノンペン泊】
3日目	エイズ孤児院訪問 子どもたちと交流します。 プノンペン発、専用車にてシェムリアップへ 【シェムリアップ泊】
4日目	CLCAS センター訪問 センターにいる子どもたちと交流します。 アンコール遺跡郡観光 アンコールワットやアンコール・トムなどの観光をします。 アンコール遺跡郡サンセット鑑賞 伝統アプサラダンスを鑑賞しながらの夕食 【シェムリアップ泊】
5日目	シェムリアップ州立病院エイズ病棟訪問 病院を訪問し、カンボジアのエイズ事情を学びます。 アキ・ラの地雷博物館訪問 自由行動 トンレサップ湖サンセットクルージング 【シェムリアップ泊】
6日目	チャラス村の小学校訪問 小学校で子どもたちと交流します。 農作業の手伝い 地方の農業がどのようなものかを学びます。 【シェムリアップ泊】
7日目	JVCにて活動説明 JVCの支援する農村地域の農業のお手伝いをします。 その後、夕食まで自由行動 リフレクション/ディスカッションタイム 旅で得たものや自分の変化などを仲間たちと語り合しましょう! フライトに合わせて現地係員が空港へご案内致します。 シェムリアップ(20:30)発→(乗継ぎ)空路、帰国の途へ 【機中泊】
8日目	東京・成田(07:00)着後、解散となります。

を宣伝するウェブサイトは「一步を踏み出そう！人生観を変える旅、ボランティア・スタディーツアー」という紹介文を掲載した。映画そのものについては「ひとりの力では世界は変えられないかもしれない、でも、ボクらはやってみた、見えてくるものが確かにあった」という解説を付した。表1は旅行のスケジュールである。

このツアーは、映画の主人公たちが訪問した場所をたどるというスタイルを採用した。ツアー初日は東京・成田を出発し、プノンベン特別市に到着。2日目はキリング・フィールド、トゥル・スラエン虐殺博物館を訪問。その後は夕日を見ながらメコン川のクルージングを楽しむ日程となっている。3日目から最終日までではシラム・リアプ州で滞在。3日目はエイズ孤児院の訪問。4日目の午前中はNGOが経営する孤児院を訪問し、そののちアンコール遺跡群を観光、夕暮れ時には舞踊を鑑賞。5日目はシラム・リアプ州立病院エイズ病棟を訪問し、その後、アキ・ラ地雷博物館を視察、夜はトンレサップ湖でのサンセット・クルージング。6日目の午前中はチャラス小学校において子どもと交流。午後は農作業体験。7日目は日本国際ボランティアセンター（Japan Volunteer Center, JVC）が支援する農村地域において農作業の手伝い。最終日の夜は、参加者の間でディスカッションを行うという内容である。

2. カンボジアをめぐる固定的なまなざし

ここで注目するのは、以下の2点である。第1点目は、「僕たちは世界を変えることができない」に見る大学生たち、または映画に共感する若者は、カンボジアという国を通しての自己変革を期待しているという点である。カンボジアに学校を建てるという経験は、「ひとりの力では」できるものではなく「でも、ボクらはやってみた」のである。「確かにあった」「見えてくるもの」は、新設の学校校舎そのものではなく、真新しい校舎に沸き立つカンボジアの子どもたちの笑顔を見ることで達成感を得た、新しい自分である。

映画に付随したカンボジア旅行は、前述の学校建設ほど大規模なプロジェクトを遂行する意図はない。小学校において子どもと交流することや農作業を手伝うことという小さな生活の営みを経験するプログラムである。しかしながら、たとえ小さな経験であったとしても、普通の自分から「一步踏み出し、人生観を変える」体験になるのだというロジックは先述の例と共通している。つまり、彼らにとって重要なのは現地で行う活動の種類や規模ではない。カンボジアを訪れる動機は、活動そのものにあるのではなく、それを通して得られるであろう自己変革であるということができる。

第2点目は、カンボジアという国だからこそ、活動の種類や規模にかかわらず、ツアー参加者が達成感を得ることができると考えている点である。ウェブサイトに掲載された旅程表が文字通り示すように、彼らはわざわざ「カンボジアの負の歴史を目の当たりに」する施設を訪問した。トウル・スラエン虐殺博物館、キリング・フィールドは虐殺の事実を伝える場所である。シナム・リアプ州立病院エイズ病棟はカンボジアの現代的問題を象徴的に示す施設である。ツアーもあえてこれらの施設をめぐり、カンボジア社会の負の側面を熱心に学ぶ。

ここで焦点となるのは、カンボジアという国に対する彼らのまなざしが虐殺、孤児、地雷、貧困、エイズというネガティブな側面と深く絡み合っている点である。彼らがカンボジア現代史の暗部を学べば学ぶほど、カンボジアで獲得する経験は、平和な日本では得ることができない尊いものとしての価値を持ち始める。カンボジアが貧困であればあるほど、そこに暮らす子どもたちの笑顔は貴重になり、その子どもたちに捧げる校舎は重要な意味を帯びる。トウル・スラエン虐殺博物館が代表するダークな観光スポットの訪問は、それらが残酷な場所であるがゆえに、彼らの旅の価値を高めることに貢献する。このようなカンボジアに対する固定的まなざしのなかで、虐殺、孤児、地雷、貧困という問題は観光資源という新しい意味を持ち、日本の若者によって消費されると言ってよからう。

注

- 1) ポル・ポト政権下で処刑されたのは約 50 万人から 100 万人と推計される。このほか強制労働、病気、飢餓のために命を落とした。犠牲者の詳細は Kiernan (1996) を参照。
- 2) トウル・スラエン虐殺博物館において無料で配布されるクメール語・英語版のパンフレットによると、それぞれの年に以下の人数が処刑された。1975 年 154 人、1976 年 2,250 人、1977 年 2,350 人、1978 年 5,765 人。合計 10,519 人 (Ministry of Culture and Fine Arts n.d.:1)。
- 3) カンボジア特別法廷はカンプチア共産党による大規模人権侵害を裁くために設置された。公式ウェブサイトは以下の通り。http://www.eccc.gov.kh/en (2013 年 6 月 18 日閲覧)。2013 年 3 月 14 日、カンプチア共産党の最高幹部の一人であったイエン・サリは、本法廷において起訴中に死亡した。
- 4) トウル・スラエン虐殺博物館に関するクメール語・英語版のパンフレットより (Ministry of Culture and Fine Arts n.d.:1)。
- 5) JICA (独立行政法人国際協力機構) が 2009 年 5 月から 2012 年 3 月までに実施した「沖縄・カンボジア『平和博物館』協力」の報告書より。くわしくは http://www.jica.go.jp/okinawa/enterprise/kusanone/pdf/cam_01.pdf (2013 年 6 月 18 日閲覧)。
- 6) トウル・スラエン虐殺博物館が配布するクメール語・英語版のパンフレットより。
- 7) 映画のなかで冒頭主人公たちは、カンボジアが抱える問題を解決することができずと無力になった。彼らは大学生である自分たちの微力ではカンボジアを救うことができないと考えた。しかし徐々に、カンボジアを変えることはできなくても、せめて自分たちが出会ったカンボジアの人々が笑顔になればよいと考えるようになった。「僕たちは世界を変えることができない、だから、みんなで笑顔をつくった」は本映画のキャッチ・コピーである。
- 8) HIS のウェブサイト http://www.his-j.com/tyo/volunteer/st/std-bokuseka.html (2013 年 6 月 18 日閲覧) より。

参考文献

(日本語文献)

- 羽谷沙織 (2011) 「ヘン・サムリン政権下カンボジアにおける教育改革と教科書にみる国家像」『立命館国際研究』23 (3) : 137-158.
- バーチャット・ウィルフレッド、土生長穂ほか訳 (1991) 『カンボジア現代史』連合出版.
- ヘダー・ステューブ & ティット・モアブライアン、四本健二訳 (2005) 『カンボジア大虐殺は裁けるか クメール・ルージュ国際法廷への道』現代人文社.
- 四本健二 (1999) 『カンボジア憲法論』勁草書房.

(英語文献)

Dy, K. (2007) *A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)*, Documentation Center of Cambodia.

Kiernan, B. (1996) *The Pol Pot regime: race, power, and genocide in Cambodia under the Khmer Rouge, 1975-79*, Yale University Press.

Ministry of Culture and Fine Arts (n.d.) Toul Sleng Genocide Museum (brochure), Cambodia.

